（KU1－1）

二〇二四年度

入学試験問題

国語

最初に、以下の注意事項をよく読んでください。

一、問題冊子は監督（かんとく）者の指示があるまで開いてはいけません。

二、監督者の指示により、最初に問題冊子の表紙と解答用紙の、指定されたらんに**受験番号**と**氏名**を記入してください。

三、試験問題の内容に関する質問には応じません。それ以外の用事があるときは手をあげてください。

四、受験中気分が悪くなったときは、監督者に申し出てください。

五、字数に制限のある問題では「、」や「。」などの記号も一字と数えます。

六、解答用紙は持ち帰らないでください。

受	験	番	号
1			

氏名

〔一〕次の――部のカタカナを、漢字に改めなさい。

① 実寸大のモケイを展示する。
② シュノウ会談が行われる。
③ 五十音順にブンルイする。
④ 祖母のタンジョウ日を祝う。
⑤ プレゼントをホウソウする。
⑥ トトウを組んで立ち向かう。
⑦ リエキを計算する。
⑧ 問題を解決にミチビく。

〔二〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、筆者はこの直前の部分で「大人」という概念(がいねん)は年齢(れい)とも性別とも無関係なものであると述べています。

著作物利用のため本文は削除します

著作物利用のため本文は削除します

著作物利用のため本文は削除します

著作物利用のため本文は削除します

問一　〰部A「烈火の如く」・B「尻馬に乗る」とは明らかに**異なる意味**として用いられる表現を次のア～ウからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A　烈火の如く

ア　手が切れる

イ　青筋を立てる

ウ　目くじらを立てる

B　尻馬に乗る

ア　人の褌で相撲を取る

イ　隣の芝生は青い

ウ　虎の威を借る

問二　――部1「大人でない、と対比される大人」とありますが、この部分を言い換えた表現として最もふさわしいものを本文中から十一字で抜き出して答えなさい。

問三　――部2「どうしたって若くて、未熟な者に見える」とありますが、これはなぜですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　年を取ることで、今まで以上に相手と自身を比較し、その若さを幼さや未熟さとしてのみ捉えるような傾向が強められていくものだから。

イ　経験や知識というものは、長く生きれば生きるほど蓄えられていくため、自身と比較すれば年少の相手は絶対的に未熟で愚かであるという真理に辿り着くことが出来るから。

ウ　母と子のような身近な対象に限れば、年を重ねたとしても昔のままの若く未熟な存在としての記憶が固定され、新たな関係性について理解されることはないから。

エ　いつまで経っても自身を基準に若いかどうかを測ることから抜け出せず、相対的な若さや熟成の度合いを引きずってしまうことになるから。

問四　――部3「このごろの鏡は、もうむかしのようなガラスを使っていないようだ」とありますが、この一文から読み取ることが出来ることとして最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　年を取って対象を正しく認識・把握する能力が衰えてしまった結果、もはや現実と妄想の狭間で寂しく漂うしかない老人のはかなさを、壊れやすいガラスに重ね合わせて示そうとしていること。

イ　自身が老い衰えているだけであるにもかかわらず、そのことを正しく把握できず、身の回りの変化全てを外的な要因によるものとして、老人が自身や周囲の変化に全く目を向けようとしないこと。

ウ　時代の変化と共に変わらざるを得ない生活用品と、年老いていくことで社会から切り離され活躍の場を失っていく自分自身を対比し、その情けなさに嘆いていること。

エ　若さや新しさにのみ価値を見いだす社会について批判的な精神を持って声を上げたとしても、それが年を取った老人によるものであるがために、その主張や姿が正しく世間に伝わらないということ。

問五　［　X　］に入れるのにふさわしいことばを**五字以内**で解答欄に記しなさい。

問六　［　Y　］に入れるのにふさわしい表現を自分で考え、**五字以上十字程度**で解答欄に記しなさい。

問七　次の(1)・(2)についてそれぞれ問いに答えなさい。

(1)　次の記録は本文を読んだ後に実施した話し合いの様子です。生徒A～Dの中から、明らかに本文で述べられた内容と**合致しないこと**を述べているものを一人選びなさい。

生徒A　「人間として老成している」とあるけれど、もちろんこれは年を取って老いている、ということではなくて、きちんと知的に成長を遂げているから変に浮ついていない、という点で思慮深い人間で、そういう人間こそ大人なのだ、ということだよね。

［司会］「大学一年生の平均年齢が、どう見ても七歳以上には見えなかった」というのは強烈だね。筆者はこれを「老人の心理をすくいとって」いると述べているけれど、これはどういうことかな？

生徒B　それはつまり、老人は必ず昔の自分とくらべて、今の人はちゃんと大人になりきれていなくて幼いのだ、という真実に気付いてしまうということだろうね。知的に成長を遂げたからこそ真実を見極める目を獲得することができるのだろうね。

［司会］筆者は一人前の大人であるということの「悪い面」についても言及しているね。「もののわかった大人である」ということの、どんな点が悪いというのだろう？

生徒C　そうだなあ。たとえば、大人としての知識や経験を積み重ねていくと、物事がこれからどう進んでいくのかということもなんとなく「分かってしまう」ようになるのかもしれないね。そうす

ると、「きっとこうなるはずだからこれはこのあたりで手を引いてしまおう」といった形でチャレンジをしなくなるということがあるかもしれないね。

生徒D　なるほど。たしかに果敢にチャレンジをしないとなれば無難な結果は得られるだろうけど、画期的な成果を得ることは難しくなるだろうね。それを筆者は憂慮して、「悪い点」だと指摘しているのだろうね。

(2)　**本文と【資料】を参考にしつつ**次の二人の生徒の会話を読み、□（すべて同じ表現が入ります）に入れるのにふさわしい表現を**五字程度で自分で考え**、解答欄に記しなさい。

著作物利用のため本文は削除します

生徒E　古語辞典で「おとなし（大人し）」という語を調べてみたところ、この語にはいくつかの意味があることがわかったよ。❶の「いかにも大人らしい」や「大人びている」の意味は、「大人し」の漢字の意味そのままのイメージでわかりやすいね。

生徒F　そうだね。❷の意味の「年配で□」というものはまさに筆者の指摘するものだね。コミュニティ（集団）の中心には色々な経験に基づいた判断ができる人間がいるように思えるからね。もしかしたら❸の意味は中心的な立場に立つ「□ひと」の性質が「穏やか」だったり「温和」だったりするというところから派生して来たのかもしれないよね。

生徒E　なるほど。もしかしたら本当にそうなのかもしれないね。「言葉の由来」を想像してみる、なんていうのも面白いものだね。

〔三〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

著作物利用のため本文は削除します

著作物利用のため本文は削除します

著作物利用のため本文は削除します

著作物利用のため本文は削除します

著作物利用のため本文は削除します

問一　――部1「気持ちが凪いでいく」のここでの意味として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　冷静さを取り戻すことによって、集中力が増してくる。
イ　単調な音が繰り返されることで、ふと眠気に襲われる。
ウ　たとえ一人でいても、特に寂しさは感じないでいられる。
エ　日々のつらさを忘れることができて、気分が落ち着いてくる。

問二　［　　］にあてはまる語を、本文中から四字で抜き出して答えなさい。

問三　――部2「きらきらした笑い声」の説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　意外な展開に驚きを隠せないで発する、他意のない笑い声。
イ　目にしたことを純粋に面白がっている、明るい笑い声。
ウ　秘密にしておけず周りに気づかれてしまう、高い笑い声。
エ　周りの人も思わずつられて笑ってしまう、大きな笑い声。

問四　――部3「心のなかでガッツポーズをした」とありますが、ここに至る真歩の心情の説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　入部する前から「私もこんな人になりたい」と憧れていた鶴先輩が部長を務めていると知り、応援したい気持ちでいるとともに、鶴先輩に憧れて受験勉強を頑張った自分が何かを達成したような気分になった。
イ　男子も数人いるなかで、ほんわか女子の鶴先輩がリーダーシップをとっているということが、私自身のこの書道部での活躍を保証してくれているような気がして、ここで頑張ってやっていこうという気持ちが高まった。
ウ　おだやかな雰囲気をまとっているのに、パフォーマンスになると体中のパワーを爆発させる芯の強さを持った姿に真歩が憧れを感じた先輩が、いざ入部してみたら部長を務めていたので、一層気持ちが盛り上がった。
エ　柔らかい雰囲気をパフォーマンスで吹き飛ばす力強さを発揮する鶴先輩がこの書道部の部長であることが誇らしい気分になり、弱々しい自分もここで頑張ることでいずれ部長として活躍する未来が想像できた。

問五　――部4「そっか……」とありますが、この時の鶴先輩の心情の説明として、最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　高校の部活動に中途半端な気持ちで取り組んでいる真歩に小言を言いたいが、どう話せば自分の思いを分かってくれるだろうかと迷っている。

イ　真歩の通学時間の負担から転校を考えるべきではないかという提案をしようと思ったが、話のきっかけが上手くつかめなくて困っている。

ウ　墨を擦ると闘志がみなぎってくるはずなので、真歩のことばを聞くと、真歩が書道を理解していないことが分かり、部長として少し残念である。

エ　真歩が気に入っている部活動を自分が辞めさせるのは申し訳ないような気もするのだが、部員の体調管理も部長がすべきことだからやむを得ないと思っている。

問六　――部5「はい……」とありますが、この時の真歩の心情の説明として、最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　今日の部活で「睡蓮」と「睡眠」を書き間違えたのはさすがにまずかったかなと後悔している。

イ　高校入学間もない後輩に大学受験のことを話すのは気が早すぎるのではないかと困惑している。

ウ　ここまでの話の流れのあとに鶴先輩はどういう妙案を出してくれるのだろうかと期待している。

エ　通学時間の負担にふれてまでしてなぜ鶴先輩は私に正論で迫ってくるのだろうと戸惑っている。

問七　――部6「折れた筆じゃ、もう書けない」とありますが、どういうことですか。真歩の心情の説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　鶴先輩が私に告げた「転校」という言葉によって私の頭はひどく混乱しているということを伝えたいのに、それを表現する手段を奪われてしまって、どうしていいか分からないということ。

イ　中学二年のときに見た先輩のパフォーマンスが私の心をささえる原動力になっているのに、その当人から転校をすすめられては、この先何を目標に頑張っていくべきかわからないということ。

ウ　初めて鶴先輩と親しく会話ができる機会だというのに、鶴先輩が私に話したいことが、私がこの高校を辞めた方がいいのではないかという提案で、それはあまりにも理不尽だと思うということ。

エ　鶴先輩に憧れて、苦しい受験勉強も乗り越えてこの高校にやっと入学したのに、その鶴先輩に退部を促されるというのは、たとえそれが親切心からであっても悔しくて仕方ないということ。

問八　――部7「その口調が何だかしっとりしている」とありますが、どういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　苗字が鶴になったことにどうにも納得がいかないという思いが鶴先輩にあって、「鷹が好きだった」とあえて話し始めたように真歩には感じられるということ。

イ　「鷹が好き」ということばの表面にあらわれていないふくみが鶴先輩の言い方には感じられて、何らかの背景を持ったものであるように真歩には聞こえるということ。

ウ　一昨年のパフォーマンスを真歩が覚えていることを喜ぶ鶴先輩の気持ちが、「鷹が好きだった」ということばにこもっているように真歩には感じられるということ。

エ　「鷹が好きだったから」というシンプルな答えで真歩をごまかし続けることに、鶴先輩がかすかな後ろめたさを感じているように真歩には聞こえるということ。

問九　――部8「青臭い反抗心みたいなもん」とありますが、そう言っている鶴先輩についての説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　母親の再婚によって自分まで苗字を変えなければいけなくなったことに納得がいかなかったのは、当時の自分がまだ聞き分けのない子どもであったからだと、今では自覚している。

イ　母が再婚して自分の苗字も変わってしまい、それまでの自分が消えてしまったような気がしていたのに今はもう納得しているのは、自分が子どもの鋭い感性をなくしてしまったからだと嘆いている。

ウ　綺麗（きれい）に舞う鶴よりも鋭（するど）い目つきで獲物（えもの）を狙（ねら）う鷹でありたいとこだわり続けてきたのは、自分の能力を過信していたからだと気付き、まわりが見えていなかったことに少し恥ずかしくなっている。

エ　親の事情に振り回されずに自分自身を貫こうとすることは、たとえその時の自分が未熟な存在であったとしても、けっして譲（ゆず）ることはできない一線だったと、今でも思っている。

問十　――部9「何だかヒリヒリした」とありますが、真歩がこのように感じた理由として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　傷口に塗る薬がかえって傷口がそこにあることを意識させてしまうことがあるように、これからどうするべきかを迷っている自分に、鶴先輩が決断を迫っているように感じられたから。

イ　変化に柔軟になったほうがいいときもあるというのはその通りなのかもしれないけれど、それを受け入れるほど大人になっていない今の自分には、まだ抵抗（ていこう）を感じてしまうことばだから。

ウ　たとえ鶴先輩の優しさから出たことばだとしても、転校をすすめることは私を遠ざけることに他ならず、「変化に柔軟になる」というのはそのことを取りつくろうための方便であると感じるから。

エ　親の事情と自分の思いに折り合いをつけることの大切さを見いだした鶴先輩が、パフォーマンスで「鷹」と書いたあの気迫を失ってしまうのも当然のことだと納得したから。